

コロナ禍での学会運営および大会運営を経験して学んだこと

第15代日本人工臓器学会理事長，高知大学医学部附属病院病院長

花崎 和弘

Kazuhiro HANAZAKI



1. はじめに

著者は，2019年11月より本学会理事長職を拝命した。同年12月に中国の武漢で発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のため，世界は激変した。激動の2年間で振り返り，コロナ禍での学会運営および大会運営の経験から学んだ5つのトピックスに焦点を当てながら概説する。

1) コロナ禍における人工臓器学会や年次大会のあり方とは？

コロナ禍で最も影響を受けたのは，毎年1,000人規模の集会型で実施されていた「教育セミナー」である。西中知博担当理事がe-ラーニングで受講できる仕組みを構築し，大過なく切り抜けることができた。また，理事会をはじめとする全ての会議をオンサイトからオンラインへ移行し，結果的に支出を大幅に抑制できた。

2020年11月の第58回日本人工臓器学会大会（図1）は，著者を大会長として，高知県の新規感染者数がゼロの期間中に現地集会型で開催した^{1),2)}。2021年11月の第59回大会はオンサイトとWebとのハイブリッドでの開催となった。全国的に新規感染者数が激減した時期と重なったため，4分の3がオンサイトで参加し，活気ある大会となった。松宮護郎大会長のリーダーシップに敬意を表する。

両大会とも現地の感染状況が落ち着いていたことと，万全のコロナ感染拡大予防対策が施行されたことが幸いし，学会参加者からの新規感染発症は皆無であった。

■ 著者連絡先

高知大学医学部附属病院病院長室
（〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮）
E-mail. hanazaki@kochi-u.ac.jp

このようなコロナ時代に必要に迫られて実施してきた様々な変革を貴重な経験と捉え，ポストコロナ時代にどのように活用していくかが，今後の学会および大会運営を円滑に進めていく上でも重要な課題といえる。

2) 令和時代に求められるコミュニケーション能力や自己変革能力をどのように生かしたら人工臓器学の発展に寄与できるのか？

人工臓器学の発展を目指して本学会の特徴を生かし，人工臓器を介した多職種連携によるチーム医療だけでなく，女性会員の取り込みや女性評議員の登用を促す男女共同参画も推進した。その中で坂本龍馬のような，誰に対しても分け隔てなく接するコミュニケーション能力や，時代の変化に適応できる自己変革能力の大切さを痛感した。こうした取り組みは，労働負担の軽減だけでなく，2024年からスタートする働き方改革にも役立つはずである。

3) 今後期待される新型人工臓器開発に求められるイノベーションとは？

本学会は医療産業促進委員会，研究推進委員会，レギュラトリーサイエンス委員会，人工臓器イノベーション委員会などが一丸となって，新規人工臓器開発事業を促進している。たとえば萌芽研究の段階からどんな些細なことでも相談できる敷居の低い「医療機器開発よろず相談所」を開設し，継続中である。会員の皆様には是非とも有効活用して欲しい。

COVID-19治療で体外式膜型人工肺（ECMO）が注目を集めたように，既存の人工臓器を生かしながら，「偉大な科学は巨人の肩の上に乗っている」という感覚を大切にしたい。人工臓器学のイノベーションを生み出すためには，big dataやAI（artificial intelligence）の活用に加えて，異分野との交流や融合も重要である。



図1 第58回日本人工臓器学会大会(高知市)

4) 人工臓器学会は間違いなく発展していくと確信できる理由とは？

国連のSDGs (Sustainable Development Goals) や内閣府のSociety5.0は、社会や経済を活性化するために地球環境の整備とデジタルテクノロジーの有効活用を提唱している。これらの理念は、本学会が掲げる「テクノロジーが医療を変える」目標とも合致する。

多職種連携および男女共同参画を推進した結果、2021年10月11日現在、本学会の会員数は4,182名と過去最多となり、そのうち女性会員数は541名(約13%)と増加した。また、評議員数234名中23名(約10%)が女性となり、他学会に比べて重要ポストへの女性の登用がみられる。更に、本学会の国際誌であるJournal of Artificial Organsの最新impact factorは過去最高の1.731まで上昇した。

渥美和彦先生や梅津光生先生を筆頭に、本学会は「師を超えていく弟子を育成する」ビジョンを持った素晴らしい指導者を多数輩出している。

これからも全会員が「人工臓器を介して人類の健康福祉に貢献する」という基本理念を尊重し、若者や女性にチャンスを与える組織運営を貫けば、本学会は間違いなく発展するであろう。

5) 人工臓器学会に期待する未来とは？

本学会はCOVID-19治療におけるECMOのように社会のニーズに応えながら、日本から世界に人工臓器学のエビデンスを発信できる貴重なアカデミアである³⁾。表1は近未来の本学会に期待する5大目標を示した。著者は必ず達成できると信じている。

2022年11月は60回目(西村 隆大会長)の記念大会を迎える。本学会の更なる発展を期待しながら、拙稿を閉じる。

表1 近未来の日本人工臓器学会に期待する5大目標

- ・多職種連携・男女共同参画・チーム医療の更なる推進により会員数が5,000人を超える
- ・Journal of Artificial Organsのimpact factorが2を超える
- ・女性の会員数および評議員数が現在の2倍以上になる
- ・女性の理事が誕生する
- ・本学会が関与した新しい人工臓器の登場

2. おわりに

コロナ禍の中、激動の2年間を理事長として舵取りさせていただき、任務を無事に終了した。これもひとえに事務局の太田様、理事、評議員をはじめとする会員の皆様、関係者の皆様の格別なご尽力とご支援の賜物である。2年間本当にありがとうございました。

謝 辞

本理事長講演の機会を与えていただいた第59回大会長の松宮先生(第16代理事長)、座長の労をお取りいただいた松田兼一先生(第13代理事長)、および参加者の皆様に心より御礼申し上げます。

なお、本論文の要旨は第59回日本人工臓器学会大会(2021年11月27日、千葉県浦安市)の理事長講演において発表された。

利益相反の開示

花崎和弘：【研究費】株式会社ツムラ

文 献

- 1) 花崎和弘：コロナ禍の中、現地集合型学会を開催して。人工臓器 **50**: 5-6, 2021
- 2) Hanazaki K: Conference report: Communication on the 58th Annual Meeting of the Japanese Society for Artificial Organs in 2020. Artif Organs **45**: 97-100, 2021
- 3) 花崎和弘：人工臓器研究の進歩と臨床展開—日本から世界へ発信する人工臓器学—。人工臓器 **50**: 30-1, 2021